

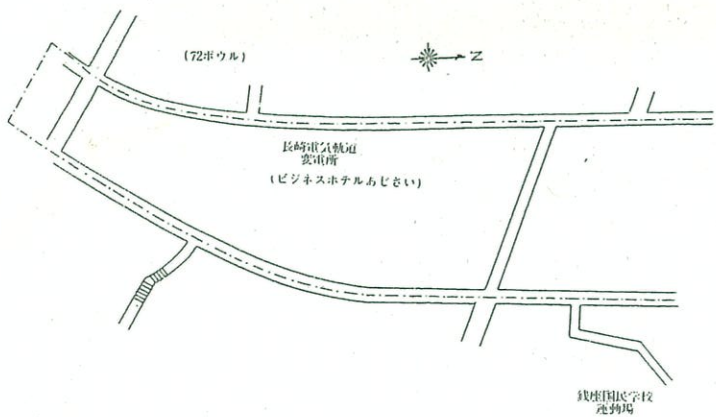
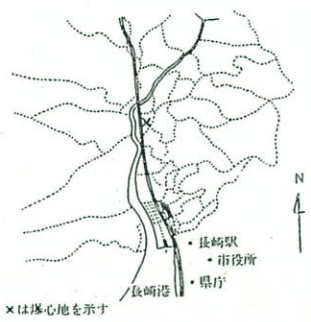
長崎原爆戦災誌

第二卷 地域編

船蔵町

船蔵町

船蔵町 ()内は現在の施設



船蔵町

一 町のあらまし

明治三十七年、長崎港を埋め立て、八千代町などとともにできた町である。町域は、御舟川（堀割）と銭座町二丁目に沿い北側の井樋の口から南側のガス会社近くまで細長く延びていた。爆心地からの距離は、井樋の口付近で一、三〇〇メートル、遠い地点は、一、九〇〇メートルである。主な建物としては、長崎電気軌道株式会社の変電所と同会社船蔵寮があった。

二 疎開

北から南へ一丁目から六丁目までに区切られていたが、町域の三分の二に及ぶ一、二、五、六丁目の民家が昭和十九年暮れごろから強制疎開となり、三、四丁目が残っていた。したがって、原爆直前の家屋数は、約七〇戸、七

現在の宝町の一部

三〇七五世帯で、人口は三五〇人ぐらいであったという。

空襲警報がひんぱんに発令されるようになった昭和二十年夏ごろから、他地区へ任意に疎開する者があり、また付近に爆弾が投下され人員に被害が生ずるのを目撃して、急ぎ家財をまとめて疎開する商店や世帯が増え、空き家になっていった家屋が散在していた。

町内会長は、石地直喜で、銭座地区連合会町内会長でもあった。

三 防衛体制

山手の崖をくり抜いて「四」の字型の防空壕が設けられ、町民の避難場所となっていた。石地セモ（三八歳）の話によると、八月五、六日ごろまかれた米軍の宣伝ビラに「カボチャは突ったか、八月八日に爆弾を落とすから四里四方に逃げてくれ……」とあり、八日は、近所の人たちと、この防空壕に避難していたが、何事もなかったのでほっとした。ビラは、憲兵がきて、集めて持ち帰ったという。九日朝も空襲警報の発令で、町内全員が防空壕に入ったが、解除になったので、それぞれの家に帰っていた時に原爆となった。

壕は、七、八〇人を収容できる規模のもので、通行者も時たま避難していた。このほか、被災時の集合、救護場所として銭座国民学校が指定されていたようである。

四 被爆の惨状

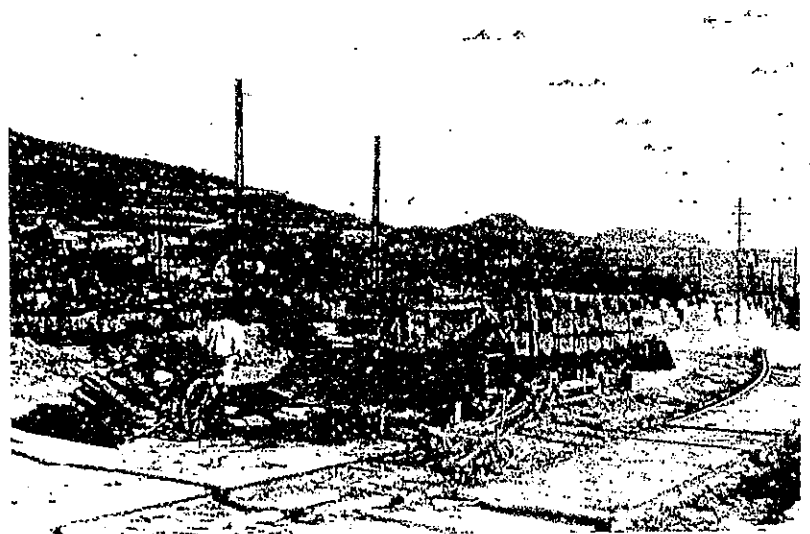
町内会長だった石地直喜の娘・栄子（一五歳）は、自宅（船蔵町四丁目八番地）で昼食の準備中であつたが、飛行機の爆音らしいものを耳にした。父の直喜、母のセモ、それに加えて妹二人も居合わせていた。

突如、砂ぼこりが舞いあがり、サラサラとこぼれ落ちたとき、父の直喜が「B29だ、爆弾だ」と叫んだ。

その直後、ドーンという音がして家が崩れた。栄子は、無我夢中で天窓から外へはい出した。母のセモが下敷きになって「ここよ、ここよ」と呼ぶ声を聞き、瓦をかきわけて埋まっているのを引き出した。次いで妹二人も救出し、防空壕へ退避させた。

セモは、町内会の責任者として、かねて夫から指示されていたので、付近を見て回った。建物は、よじれるように倒れ、満足な家は一軒もなく、ところどころから火がチヨロチヨロと燃え出しているのが見え、助けて、早く助けてくれの叫び声も、あちこちに起こっていた。崩れた家屋のすき間から、埋まっている人の顔や姿も見られた。やがて、警防団員、捕虜の数が消火作業をしているのを認めたが、道路や軒先には、町民や通行人らしい者の死体がごろごろ転がり、火炎が一度に燃えひろがって足元に迫ってきた。

家の下敷きになっていた夫、直喜は、第四分団の警防団員に救出されていたが、腰にとび口がぐさりと突き刺さっており、背負って町内会防空壕に運んだものの、壕内は、負傷者が一杯に詰めて足の踏み場もない状態だった。仕方なく、五社山を目ざして避難した。



崩壊した電車
(松本 栄一氏撮影)



ひっくり返ってべしゃんこになったトラック
(松本 栄一氏撮影)

避難する途中、黒焦げになっている者、血塗れになって、虫の息で助けを求める人たちがいたが、これらの人たちにかかり合っている余裕すらなく、自分自身をどうすればよいか、わからぬまま、ただ必死に逃げた。電柱という電柱は倒れて中程から折れたもの、電車の三角柱もへし曲がり、電線が垂れ下がってくもの巣のようにもつれて散乱し、道路をふさいでいた。

燃え広がった火災は、たつ巻のような風にあおられて火勢を増し、救助を求めていた人々の声のみ込んでいった。町全体が燃え尽きたのは、原爆炸裂から約一時間後の正午ごろで、意外に早かった。五社山麓の畑まで逃げのびた栄子は、さつまいものつるをおおって恐怖に震えている。

セモの弟、島本一家の全員も円陣のような形で座ったまま、焼け跡に黒焦げ遺体となっていた。

火の魂、ゆらゆら

その夜、五社山一帯に避難した町民たちは、敵機の襲来におびえながら、燃える市街をながめて一夜を過ごした。石地栄子が目撃したのは「浦上方面から船蔵町にかけて人魂が人の背丈ぐらいの高さを、ゆらゆらと飛び交い、それは、数限りないたくさんの方であった」という。

また、午後四、五時ごろ、日向雨のような水滴が落ち、さつまいもなどの葉をぬらした。手でさわると油のような色をして人々は「アメリカの飛行機がガソリンをまいた」とおびえた声でつぶやいていた。町民の多くが避難していた山の広場に「いま〇〇さんが亡くなった。△△さんも死んだ」など、町内会の伝令がきて知らせていたが、

ぼう然自失の人たちの耳には、空虚に響くのみであった。

浦上方面から逃げてくる罹災者の多くは、ボロボロの着衣、わかめやめのはのようになった皮膚を垂らし、見るも無残な姿をして、浦上は、もつとひどか……と、いつて幽鬼のように立ち去っていた。

金比羅山陣地で死亡した兵士の死体が忠霊塔広場に運び込まれたのは、夕方から夜にかけてであった。これら軍人将兵のおびただしい死体は、戦争の「必勝」を念じていた人々の心を暗くした。

五 被爆後の混乱と生活

十日の早朝、負傷して山林中に避難している石地直喜のところに、青年団員数人が登ってきた。

「町内会長さん、死亡や罹災証明などのこともあるので降りてきてくれませんか」

妻、セモも一緒に山を降った。道路は余熱があつて歩けないくらいであった。町内の人々が防空壕前に集まっていた。直喜は、末っ子の正子のノートを破つて罹災証明を書いて発行した。

防空壕に残されていた負傷者は、町内の鈴木医師が薬品不足の中で懸命に手当していた。

家の下敷きとなつたまま焼死した人は、燃え尽きて白骨となつていたため、火葬する必要はなかったが、町域のあちこちに散在している遺体、また身元不明の死体は、長崎電気軌道株式会社変電所横で、疎開跡の古材などを使って火葬された。

井樋の口交番所の付近では、三菱製鋼所や付近一帯で死亡した幾百体もの遺体が集められ、連日、茶毘する火煙が立ちのぼっていた。

原爆から二日たった八月十一日ごろ、にぎり飯の配給があつた。警察の救援隊がトラックで運んだものを一人二人ずつ、町内の防空壕や五社山の麓一帯に避難していた者に配り歩いた。次の日から歩ける者が井樋の口の付近まで出掛けて、助けぬ人たちにも配給していた。

食糧、日用品の欠乏は、言語に絶するほどで、いもづる一束、ちり紙一枚の配給にも血眼になつて行列し、飛びつくありさまで、飢餓線上をさまよう人々は、飢えをしのぐため物々交換の生活を続け、野草や雑草を切りきざんで口にした。

焼け残った疎開家屋の古材、トタンなどを拾い集めて瓦礫の中に貧弱な小屋が散見されるようになったのは、秋風がたち初める十月中旬ごろであった。

それでも一番早く建てられたのは、石地直喜宅であり、ここが町内の連絡事務所とされた。次いで増山、白木宅などのバラックが建てられたが降雨や暴風雨時には、雨もり、浸水がひどく難渋を極めた。

出血で死亡する人たち

防空壕暮らしを続けている者の中に、血便をする者が多かつた。便所が御舟川の川畔に急造されていたため、それがわかつたのである。発熱して下痢症状を起し、赤痢ではないかと思われる症状で苦しみながら死んだ人もあつた。

また歯茎から出血し、異様な臭気を含む粘液、だ液を吐きながら死亡する者もあつた。なかには、髪の毛が抜け落ち、貧血を起こしてひん死の状態で苦悶するなど、症状はさまざまであつた。

このような環境を恐れて町を離れて行く人々もあつて、十月ごろに町内に居残つた者は、二〇人足らずとなつた。しかし、いったん離町した人々も年が明けたころから再び復帰する者もみられた。

あとがき

昭和五十二年三月第一巻総説編の発行に引き続き、第二巻地域編の編さんに取り組んできたが、ここによくその作業を終え発行の運びに至つたことは、ひとえに関係各方面の絶大なご支援ご協力のたまものと深く感謝している。

本巻は、長崎原爆戦災誌全四巻のなかの第二巻目に当たる。

本第二巻地域編の構成は、序章と各町ごとの状況記述とからなつてゐる。まず序章において、被爆当日のあつたらしい長崎の状況から、原爆搭載機の行動、原爆による悲劇の舞台となつた浦上地区の歴史と発展の過程、原爆の惨状と救援救護、死体の収容、さらに被爆者の生活と長崎国際文化都市建設法の公布に至るまでの復興への足どりなど、原爆に関連する一連のことがらを幅広く概説的に述べるとともに、これらの状況を各町（地区）ごとに具体的に詳述している。

本巻に収録した地域の範囲は、爆心地からおおむね二キロ以内、いわゆる爆心地帯に属する区域を主として当時の町単位に三二地区にわけ、各地区ごとにその状況を詳らかに記した。なお本巻に収録した地域以遠の状況については、第三巻で記述することになっている。

本巻の記述は基本的には体験者の証言を基とし、これをとりまとめた形で客観性をもたせているが、さらに専門的、学術的分野のことがらには第四巻学術・資料編にゆずることとした。

本巻にそう入した絵は、一部を除きほとんどが被爆者自身が当時を回想して描いたものである。原爆に因る諸現象は、複雑多岐で、場所により人により証言もさまざまであるので、本書においてはなるべく多数の人々の証言を手がかりとして編集をすすめるよう努めたが、原爆の実態は容易に書き尽くし得るものではなく、なお集録しきれなかつた数々のことがらが残されている。しかし本書がその実態を知るうえにおいて一助ともなり得れば、まことに幸いと思う。